

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 24 日現在

機関番号：32604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011年度

課題番号：21720074

研究課題名（和文） 《文学》の生存戦略——戦時下日本語文学の再審に向けて——

研究課題名（英文） Survival strategy of Japanese literature during World War II

研究代表者

五味 淵 典嗣 (GOMIBUCHI NORITSUGU)

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10433707

研究成果の概要（和文）：

本研究では、1930年代から40年代にかけての戦時体制下に生きた文学者たちが行った国策への協力や政治的な活動の再評価を試みた。具体的には、1930年代から1940年代にかけての同時代言説の分析を通して、文学者たちが、戦時体制下の政治的・社会的な状況といかに向き合い、みずからを適合させていったかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I attempts to reassess political activity and cooperation with wartime national policy of Japanese writers during World War II. Mainly I analyze contemporary discourse around 1930's and 1940's, and I elucidate how Japanese writers adapted to wartime political and social circumstances.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近現代日本語文学、メディア、自由主義、言論統制、戦争と文化、デジタル・アーカイヴ

1. 研究開始当初の背景

本研究主題は、主に私がかかわった二つの科学研究費研究課題での活動の延長線上に着想されたものである。以下、その経緯と背景について記述する。

(1) 2005（平成17）年度より私は、科学研究費プロジェクト「改造社を中心とする20世紀日本のジャーナリズムと知的言説をめぐる総合的研究」（基盤研究(C)、松村友視慶應義塾大学教授）に参加してきた。慶應義塾図書館に寄贈された旧改造社の編集・経営関係資料

について、日本近代文学・中国近代文学・出版メディア史・比較思想史を専攻する研究者が、それぞれの立場から調査・分析を行ったこのプロジェクトにかかわる中で、とりわけ私の関心を惹いたのは、改造社資料から発見された、戦時下の業界団体や国策会社である日本出版文化協会・日本出版配給株式会社とのやりとりを記録した文書の束であった。戦時体制下において1冊の本を作ることが、どのような法的・制度的な仕組みの下に置かれ、その中

で誰が・誰に宛てて・どんな書類を作り、いかなる交渉や駆け引きが行われていたかを伝えるそれらの文書から、具体的な様相をたどり直す中で、従来の研究において〈戦争への協力／抵抗〉という枠組みで語られていた問題について、より具体的で、精緻な検討と再評価を行う必要性を痛感するようになった。

(2) 同じ問題意識の重要性は、2006(平成18)年度に採択された科研費若手研究(スタートアップ)「旧植民地地域発行日本語逐次刊行物に見るメディアの共同性構築機能についての研究」(課題番号18820025、2006～2007年度、研究代表者・五味渕典嗣)の研究に携わることで、異なる位相から確認することになった。文学言説の研究が洗練させてきた言説分析の手法を応用しつつ、台湾島内で発行された週刊日本語新聞のメディア論的位相とコミュニティにおける役割について検討したこの研究の結果、満州事変前後、台湾での社会運動が可視的なレベルでは崩壊・後退していく状況にあって、一部の台湾人活動家たちが、いわゆるイエロー・ペーパーにも似た媒体の日本語欄で、匿名での言論の陣地戦を繰り広げていたことが見えてきたのである。

(3) 以上の経緯から、戦時体制下の日本語の文学言説について、〈転向と抵抗〉という主体性のレベルに定位した従来の研究動向に対して、新しい視点を提出できるのではないかと構想した。近年の思想史や歴史社会学の領域では、この時期の知的言説の動向について、〈戦時変革〉をキーワードに、個人の主体性や思想的な一貫性のみを問題とするのではなく、むしろそのような〈主体性〉を構築した同時代言説の布置に着目した、刺激的な知見が提出されている。また、台湾や韓国の近代文学・文化を研究する場面では、1930年代後半以後に登場する台湾人・朝鮮人日本語作家の実践をめぐって、ともすれば親日／反日といった裁断的評価に陥りがちな発言についても、繊細にその言説の宛先と含意とを見定めることで、近代性や公共性にかかわるより根深い問題を取り出していく考察が展開されている。こうした、隣接する学術領域(思想史・メディア史・歴史学・社会学)や、隣接する地域を対象とする研究者の議論を積極的に参照しながら、日本と中国との戦争が本格化していく

過程で、不幸にも東アジアを覆うことになった〈非同時的な同時性〉という観点から、日本語を第一言語とするものが、日本語で書いた文学言説を捉え返すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、1930年代後半以後、とりわけ日中戦争期から第二次世界大戦終結までの時期を対象に、さまざまな場所で《文学》に参加した(あるいは、参加していると考えていた)者たちが、自分たち自身の存在と《文学》領域の存立を支える社会的・経済的な基盤をいかに維持し、担保しようとしたかという問いについて、単に言説分析のレベルにとどまらない、多角的な検討を試みるものである。なお、「《文学》の生存戦略」という題目は、本研究にかかわる両義的な問題意識を表現したものである。第一に、1930年代後半において、従来の文学言説の生産・流通・消費にかかわる環境を変化させないために、既存の《文学》の外部を積極的に導入しようとしていた行為者たちの動向を批判的に検討すること。第二に、検閲体制の強化・用紙統制の開始など、言説にかかわる規制が厳しさを増す中で、文学言説という形で批判的な言論の場を確保しようと企図していた言説の送り手たち(ここには、新聞・雑誌の編集や製作や流通に関与したさまざまな行為者を含めている)の日常化された・埋め込まれた抵抗の痕跡を前景化すること、の二点である。

3. 研究の方法

研究の方法としては、以下に述べる3点に特に留意した。

(1) 戦時下の日本語文学・文化をめぐる研究の現状を踏まえ、とくに同時代の言説資料の集積と分析を行う。その際、単に言説の内容や形式の分析にとどまらず、その言説が属する文脈や、その言説に干渉し、さまざまな力を及ぼしている法的・政治的・経済的な背景にも着意した検討を心がける。

(2) 日中戦争期以降の時期を取り上げた、近年の歴史学・社会学・メディア史研究での成果を参照しながら、それらの達成を踏まえた文学研究・文化研究の新たな展開をめざす。また、1930年代～40年代を対象に、学術領域を横断する研究が行われている学会・研究

会・ワークショップに参加し、研究成果の発信と研究上の交流を行っていく。
 (3) 日本国外の研究者との連携を通じて、現在の国境の中だけに自閉しない視野を確保する。特に、本研究課題が植民地帝国としての日本の統治機構と深く関係することに鑑み、同じ時期の帝国の各地域で活躍した文学者・文化人の動向に関心を持つ国外の研究者の研究プロジェクトや共同研究に積極的ににかかわり、研究のネットワーク作りに努める。

4. 研究成果

本研究課題によって得られた成果は以下(1)～(3)に掲げる通りである。なお、一連の研究の過程で見出すことのできた論点を含め、これらの成果は、新たな研究課題「言説の生＝政治：戦時下日本語文学に関する総合的研究」（科学研究費若手研究(B)、課題番号24720104、平成24～26年度）でさらに深化させ発展させていく予定である。

(1) 1930年代文学の可能性と限界

1930年代の日本語文学の場は、さまざまな可能性に開かれていた。1910年前後にデビューした書き手たちが文学的な完成期を迎えていたし、ヨーロッパの20世紀文学に強く刺激された若い書き手たちが、さまざまな文学的実験を試みはじめていた。大衆小説・通俗小説は多くの読者を獲得していたし、日本帝国の域内で、それぞれの屈折を含んだ選択の結果、日本語で書くことを選んでいく、植民地出身の書き手も登場した。あくまで日本語の文学表現の観点から見てではあるが、1930年代は、ある意味で日本語による近代文学の完成期であり、同時に、「日本語の近代文学」という制度を揺さぶる実践が生まれ出る契機を潜在させていた時期でもあったのである。

だが、この時期の文学・文化言説は、ファシズムへと傾斜する政治的な状況と、文学・文化を取りまく社会＝経済的な要因によって、大きな制約を受けてもいた。とくに、芥川賞・直木賞に代表される1935年前後の文学賞創設ラッシュは、〈純文学〉にかかわる若手作家の経済的な苦境のあらわれに他ならず、書き手の〈生存〉をめぐる問題は、文学言説の関係者にとって、決定的なアキレス腱となっていた。

その最も端的なあらわれとして、本研究では、1934年～35年にかけての〈行動主義文学論争〉をめぐる一連の動向に注目した。青野季吉、小松清、舟橋聖一らによって主導されたこの論戦は、天皇機関説問題のような右傾化の状況に対し、左翼からの転向作家を含む広義のリベラリズムに抛る連携を呼びかけたものだった。しかし、ここでの議論は、政治的な抵抗性を〈純文学〉に固有の特質として限定する一方で、出版資本や文芸ジャーナリズムを〈純文学〉の敵と名指すことで、連携を呼びかける言葉が、逆に文学言説にかかわる者たちの分断を深めてしまうという悲喜劇的な結果をもたらしてしまった。このことは、ネオリベラリズムに対する文学／人文学の抵抗という今日的な問題にとっても、重要な先例を提供している。文学という言説領域の生存を目途した行為者たちの言動や行動が、いつしか、文学者の生存の問題として語られるようになり、結局のところ、自分(たち)の生きる場所の確保を優先させる発想を正当化してしまっているのである。1930年代半ばのリベラリズムをめぐる論議は、抵抗を語る言葉が抱える困難を改めて意識させる事例だったと言える。

(2) 戦時体制下の出版統制をめぐる

日本帝国の戦時体制期には、言説の生産と流通にかかわって、戦争遂行権力からの様々な制約や干渉が存在したことは誰もが知る通りである。だが、しばしば誤解されるのだが、戦時体制期の日本語の文学的・文化的・思想的なテキストは決して無視することのできない厚みを持っている。敗戦後に重要な仕事をする書き手の多くは、すでに戦時体制期から言論活動を展開していたのである。

以上の問題意識を踏まえ、本研究では、一般に〈出版新体制〉と呼ばれる、日中戦争開戦以後の言論統制・出版統制にかかわる動向に着意した。とくに、近年著しい進展を見せている出版検閲研究で明らかにされた知見を踏まえ、戦時体制期の日本に特徴的な問題として、書籍・雑誌の出版物用紙統制にかかわる制度化の様相と運用の実態について、調査と検討を行った。

まず指摘すべきは、〈紙〉という資源に注目する統制の仕組みについて、当時の文学者・文化人が様々な介入を試

みていたことである。〈紙〉の支配が結果する潜在的な〈力〉のありようを汲みとることができた一部の文学者・文化人たちは、政府の情報関係部局（内閣情報部、情報局）が主導した出版業界の〈新体制〉に積極的に参加し、役割を果たすべきだと主張する。結果として、新聞を除く出版物用紙の管理・統制は、出版業者の業界団体という建て前で作られた日本出版文化協会（文協）が実務を担うことになるが、文学者・文化人たちは、すでに自分たちの代表として岸田国土を送り込んでいた大政翼賛会文化部との連携・協働を通じて、〈文化〉というキーワードに依拠した後退戦を企てていたのである。

こうした動向は、文協が解散し、より強力な統制団体・日本出版会が発足するまでの言説の生産と流通に、一定の影響を与えたと考えてよい。文協が監督官庁である情報局と合作した出版用紙統制の制度は、きわめて技術的・工学的で、従来の出版検閲とは異なる〈力〉を作用させる仕組みとして構想されていた。だが、業界の混乱を避けるという理由で出版業者の自由裁量の余地をある程度残してもいたこの仕組みは、同時に、徹底した文書主義的な統治手法を採用することで、形式化された文書の作成と授受になじんだ知識人層にとって有利となる制度でもあった。文協や大政翼賛会文化部への積極的な参加を主張した文学者・文化人たちは、戦争遂行権力から〈文化〉の領域を守ると主張したが、実際に作動を開始した用紙統制のシステムは、そのような文学者・文化人たちが不利益を蒙るようなルールの変更とはなっていないのである。

このことは、関連する二つの問題を提起する。ひとつは、〈文化〉という概念の政治的含意という問題である。日中戦争は、日本帝国が本格的に情報戦を意識することになった最初の戦争だが、その中で戦争遂行権力は、〈文化〉領域の領有＝盗用の必要性や、表象のコントロールを通じた世論工作の重要性を了知していた。つまり、誰も「文化」がなくなってよいとは考えておらず、むしろ〈文化〉のイデオロギー的側面の積極的な活用が目指されていたのである。

とするなら、日中戦争期以後、文学者や文化人が、政府や軍と関係の深い公的な組織に関係していったことが、

たんに「戦争協力」という個人的な問題にとどまらない射程を持つことになる。総力戦を戦う戦争遂行権力は、短期的な政策立案・各種調整業務・煩雑化する事務作業の処理のために、大量のテクノクラートを必要としたが、文学者や文化人たちは、そうした体制に包摂された言葉の技術者であり、知識の提供者でもあったと言えるのだ。

(3) 戦時末期の戦後構想

現在のわれわれは、日本時間の1945年8月14日にポツダム宣言受諾が打電され、翌日にヒロヒトの声で「臣民」たちに告げられたことを知っている。だが、まさにその時間を〈いま・ここ〉として生きた人々は、政権担当者を含め、いつ・どのようにこの戦争が終わるのか、その後の人々がどんな世界を生きるのかについてそれなりの予測や期待や願望はあったにしても、本当には分かっていなかった。しかし、国家の敗北は、そこに住む人間の滅亡を意味しない。戦争の敗北は世界の終焉とは同義ではない。日本帝国の敗北によって新たな始まりを生きられる人々は多くいた。ヒロヒトの呼びかけを聞いた列島の「臣民」たちに限っても、かりに沖縄だけでなく東京や大阪や京都や奈良の街並みが灰燼に帰したとしても、どこかで人は生き残るのである。

とすれば、自分自身が生き残れるか否かは別としても、敗北という終わりの後の始まりを意識した人々は、少なくなかったはずである。丸山真男は日本における「近代的思惟の成長」の不完全性を反省し、花田清輝は伝統的な義理人情と官僚主義的な形式性の双方を揚棄する「組織の条件の探求」を志していた。柳田国男は、列島の外で戦死した若者たちの霊を戦場を彷徨う無縁仏にはできないと「先祖の話」の筆を執ったのである。

とくに本研究が注目したのは、戦時体制下のイデオログとして知られる保田與重郎の1943年以降の発言である。日中戦争期から太平洋戦争の初期にかけて旺盛な著作活動を展開していた保田は、1943年夏以後、明らかに敗戦後の世界を意識した発言を展開しはじめていく。特に、保田が応召の直前に書いていた〈農〉と〈祭り〉をめぐるテクストは、彼の生きた「聖戦」にかかる問いの地平を、国家の政治制度や経済体制ではなく、美的で観念的な生活

様式 C-19

様式のレベルに落とし込むことで、「神州不滅」の信念を再定義するものだった。かりに国家が敗北し、どんな体制の中で人々が生きるとしても、しかるべき仕方ではコメをつくり、しかるべき仕方ではカミに感謝することを忘れなければ、「神州」は滅びない。かりに日本が敗北し、他国・他民族による支配を受けたとしても、決して滅びないなものがある、ということ。戦時末期の保田與重郎は、戦時期に構想された戦争後の世界の表象を、いわば終わりの後の始まりの姿を彼なりに幻視していたのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 五味渕典嗣、甲斐のない多忙——戦時下日本語文学論序説、文学(隔月刊)、査読無し、11巻2号、2010、138-154

② 五味渕典嗣、社内文書は何を語るか——『改造社出版関係資料』への一視点、大妻国文、査読無し、42号、2010、171-187

③ 五味渕典嗣、漸近と交錯——「春琴抄後語」をめぐる言説配置、大妻国文、査読無し、43号、2012、167-183

④ 五味渕典嗣、紙の支配と紙による支配——《出版新体制》と権力の表象、Intelligence、査読有り、12号、2012、114-124

[学会発表] (計7件)

① 五味渕典嗣、《文学》の生存戦略——日本語文学の「昭和10年代」——、東京大学グローバルCOE(共生のための国際哲学研究センター(UTCP))、延世大学韓国学術研究院ワークショップ「人文学と公共性」、2009年9月28日、東京大学駒場キャンパス

② 五味渕典嗣、言葉にとって〈霊〉とは何か——保田與重郎の言語認識、昭和文学会第46回研究集会、2010年5月15日、昭和女子大学

③ 五味渕典嗣、危機の言説に抗して

——「日韓トランスナショナル」のために、東アジア文学・文化研究会国際ワークショップ、2010年8月20日、成均館大学(韓国)

④ 五味渕典嗣、『三田文学』の戦争、第412回慶應義塾大学国文学研究会、2010年11月13日、慶應義塾大学三田キャンパス

⑤ 五味渕典嗣、敗北への想像力——保田與重郎の敗戦前夜、国際日本文化研究センター共同研究会「日本浪漫派とアジア」、2011年3月26日、国際日本文化研究センター

⑥ 五味渕典嗣、言説の生=政治：戦時下日本の言論統制をめぐる、国際ワークショップ「1930/60、制度・資本・移動」、2011年10月9日、大妻女子大学千代田キャンパス

⑦ 五味渕典嗣、紙の支配と紙による支配——《出版新体制》への一視点、第65回20世紀メディア研究会、2011年12月17日、早稲田大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

五味渕典嗣 (GOMIBUCHI NORITSUGU)
大妻女子大学・文学部・准教授
研究者番号：10433707

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし